番匠川（ばんじょうがわ）の呼称について

事務局長　清田義雄
（佐伯市東町）

地名を尊重したい

文字はどう読んでもよいと考えておられる方もあるが、固有名詞は一つのものに限った名称を表わす詞で、地名でも、人名でも固くまもって称えてほしい。

正しい名称を使って下さるだけで親しみがわく。間違っていてもやっきになって直さなくても何とか通ずる場合は、知らない人たちだからしかたがない、とあきらめているのだが、この親しみこそ社会生活の中で欠かせない本源的のものがある。ここに取りあげた番匠川の読み方のちがいに、権威で従わせようとする心理が見えるから敢えて所見を発表して皆様のご指教をいただきたい。

佐伯の地名は佐伯人がつけたもので、必要に応じて永い間に徐々にきまってきたもので他の方にもそう呼んでもらいたい。

「字、小字は、久しい間人の口から耳に伝えられたもので適当な文字はなかった。地名に漢字をあてたのは近世の事業、それまで平仮名で通っていた」

こうした漢字をあてはめたことで混雑してきた。土地に馴じみの少い人は漢字をいろいろ読みちがえることも多くなったが、その音感が大切だと思う。ばんじょうの場合、佐伯の訛（なまり）からきた呼び方でなく、辞書に明かにされている正しい呼び方をなぜ建設省が変えるのか。

番匠の地名を『佐伯史談』でとりあげたのは昭和四十

四年四月に「番匠の歴史に憶う」木田長会員の、

注2 「番匠川」ーそれは本当になつかしい名称でその出所をつきとめたい。鎌倉・室町時代に使われた呼称と思う。それが何故郷土の川につけられたか。

『吾妻鏡』に元暦源平合戦に緒方惟栄が、軍船を範頼に献上。――から推測して大がかりの造船設備があったか、豊南奥地の豊富な木材資源と地理的にも格好である故に、嘉吉年間の大内来攻もその造船基地の襲撃ではないか。

今に至るまで農家には大工（番匠）達が半ば世襲のように大工職につけようとするのも奇とする。

この稿の補いに羽柴副会長のつけた元「番匠」の地名を入れた地図をのせている。

次に史談会で問題にしたのは、昭・五五・七・一〇の大分合同新聞「灯」欄の羽柴副会長の提言である。

前略ー「建設省や、国土地理院をはじめ、一般に「バンショウガワ」としているが、佐伯の人は必ず「バンジョウガワ」と濁って呼ぶ。実は番匠（ばんじょう）という地名が歴史的に先行している。

中世、当地方に佐伯氏が勢威を振っていたころ、山城栂牟礼（とがむれ）にほど近い、今の番匠大橋近く日豊線鉄橋の間に、山城構築や武器鍛造に必要な大工や鍛冶（かじ）職の人びとの集落があり、「番匠＝ばんじょう」という地名が生れたとされている。ただし言葉としては「バンショウ」の方が正しく、辞典もそうなっているが、何百年も濁って呼んでいるので、歴史的地名として許容願いたい。

何にしても「バンジョウガワ」という音韻、そのひびきがすばらしいではないか。」

羽柴氏の提案は遠慮して書いてはあるが主張の強さは納得していただけよう。実はこの問題は、弥生の現地探訪で話合った直後の投稿である。

「ばんじょう川」と建設省が堤防上に立てていた川名の看板をじ。の濁点を消して廻った時期は、右の事例前の昭和五十二、三年頃らしい。建設省に質（ただ）しても明瞭な答えは得られなかった。濁点を打って貰う交渉をしても直す意志はないらしい。

建設省の掲示という事は、それに従わせようとする強制力が強い。お上に従順にと育てられた庶民は、「まあいいわ、俺たちゃばんじょう川で育ったけぇ、そう言や

あええ。よそから来た人達ぁ知らんのじゃけえ、わかりさいすりやぁええが。只知っとる人と、知らん人じゃぁ仲良うなり方がちがやぁせんかのう。」

注13 富来教授から激励のお手紙をいただいた。
11・25大分合同記事拝見　「番匠（ばんじょう）」はぜひ守って下さい。（正しい地名を）
これを番所（ばんしょ）→ばんしょうなどとは、素人考えの、牽強付会もいいところです。
歴史的な地名の尊さ。地名は〝生きている歴史〟です」

大分市内の新しい地名と番号のデタラメさと、京都が古い地名を断乎として残すのとは、よい対照です。
佐伯もさいきです。

建設省もわかってくれてはいるらしく、本心は直したいが面子（めんつ）にこだわっているらしい。
「建設省で出している学童用読み物の『河川にまつわる話』注4の（番匠川（ばんじょうがわ）のおこり）の中に、子供達には、ばんじょう川として資料提供をしてきているし、バンショウガワと言っている人もあるから看板を書き直す考え方はない。」と。こういう論理があるだろうか。

「番匠橋」の古いらんかんには「ばんじょうばし」と書いてあった。今の番匠橋にも左に、三十七年十二月と切畑側に書いて、右側にひら仮名で、「ばんじょうばし」と書いてある。（ＮＨＫ調査）

一体濁点を消して歩いたのはどんな意味なのか、間違いは改めればすむ事であるのに直さないということはどういうことなのか。その言い訳の一つは「特にこの看板を注意する人は少いのでどちらでもよいでしょう」という回答に至っては正気の沙汰とも思えない。

番匠の読み方を辞典で見る。

一、「下学集」注5
人倫門〜　番匠（ばんじょう）　飛弾之流也

二、「広辞苑」　第一版
ばんじょう〔番上〕順番に交替し、宿直すること
ばんじょう〔番匠〕①大和、飛弾などから京都へ上って勤番した大工。番上。②大工・こだくみ。以下略。

三、「広辞苑」　第三版
ばんしょう〔番匠〕⇩ばんじょう

ばんじょう〔番上〕順番に交替して宿直。以下略
注、（一版の大工の解はない）　↓長上が加わる
ばんじょう〔番匠〕①（正しくはバンショウ。番上の工匠の意）古代、交替で都に上り、木工寮で労務に服した木工。②大工（だいく）に同じ。ー・がさ…以下略
私見、「見出しばんしょうでは、ばんじょうを見よとの記号を示し、ばんじょうでは、正しくはバンショウとは解しかねる。正しい見出しの所で解釈する事が辞書の本来の筋だろう。」
四、〔角川地名辞典〕（大分県）
ばんじょうがわ　番匠川
ばんしょうがわともいう
「ともいうということは主客があるということ。」
五、〔日本河川ルーツ大辞典〕注6
〔番匠川〕（バンジョウのルビーがつけられている）
川名ルーツの項に、番匠とは中世の大工のこと。大工の折尺（清田注　曲（矩）尺・番匠矩の事と思う）のように曲りくねっているところから名づけられたか。
中世の栂牟礼城から、江戸時代の城下の河ぶちに大工集団か番所のあった所から川の名がつけられたか。
番匠川の名は、この附近から川口迄をいっていた。次第にその上流を含めての名称となった。
私見、上、中流の本匠村は、番匠川の本流の意味で名づけられた村名。合併の時の村名は村民の投票に依った事が本匠村史に記されており、ほんじょう村と呼んでいる。（本匠村教委の答）
六、〔日本国語大辞典第八巻〕
ばんじょう……ジャウ〔名〕〔番匠〕
（ばんしょうとも）
①　番上の工匠の意・むかし、大和・飛弾などから交替で京に上り、木工寮に居して宮廷の営繕に従事した大工（だいく）。㊀正倉院文書ー天平六年尾張国正税帳（寧楽遺文）「番匠壱拾捌人」、㊀金比羅本ー保元白河殿攻め落す事「縦番匠が鑿にて打ち候とも」
②　転じて一般の大工の称　㊀宇治拾遺ー以下（事例省略）　㊀大平記　㊀浮世草子・日本永代蔵
注、右の事例の中でバンショウの読みは大平記のみの一例が示されて、他はバンジョウ。
参照古辞書十冊の名があげられている
七、〔日本建築辞彙〕注7

ばんじょう（番匠）昔飛弾国ノ匠、毎年九月ニ京都ノ番上交代セシニ因リ、此名起レル由、白石ノ著書、東雅ニ見エタリ、ソレヨリ転ジテ広キ意味トナリ、普通ノ木匠ヲ斯ク称スルニ至レリ。

以上の資料を挙げて、佐伯人の用語の正しさを主張して納得がいただけたら建設省も訂正願えるとありがたい。

注1、柳田国男全集　第二十巻、第二十一巻、地名の宛字、意味、起り、参照

注2、「番匠川の歴史に憶う」大阪市在住賛助会員投稿「佐伯史談五十一号」

注3、来信　大分大学名誉教授　富来隆から特に寄せられた九州東海大学教授

お手紙

注4、「河川にまつわる話」建設省九州地方建設局、河川部編、の中に弥生町民俗資料保存会提供の弥生のむかし話の中で（番匠川のおこり）が採録されている。

注5、「下学集」元和本、岩波書店、亀井孝　校

注6、〔日本河川ルーツ大辞典〕建設省　池田末則　村石利夫編

最も権威がある辞典といわれる

内容は伝承的のものを蒐めたようで、学問的評価よりも読み物としておもしろい。

注7、〔日本建築辞彙〕工学博士中村達太郎著、丸善初版明治三十九年－改訂増補　昭和十二年十八版

なお〔大辞典〕全26巻平凡社刊の中でも

「バンジョ　番匠　番匠の訛」

「バンジョー　番匠㊀……畧」

と解説されていることを書き添えておこう。